

地域の活性化と 鉄道の役割

鹿野道彦
衆議院議員

Assertion of Locality and Role of Railway Transport

Michihiko KANO

Member, The House of Representatives

現在、我が国の経済社会は大きな転換期を迎えている。高度情報化の進展に見られるよう、生活の水準の向上、経済のサービス化・ソフト化などに伴い、我が国において新たな国土の均衡ある発展が望まれている。このような新しい国土の形成においては、人の交流、物の交流、情報の交流が地域の活性化の源となる。

四全総（第4次全国総合開発計画）の中にも、交流の活発化は、地域間の市場や資源を相互に活用することによって経済活動範囲を拡大、活発化し、自らの地域のもつ風土や歴史に培われた独自性への再認識から地域アイデンティティをかん養し、また、地域相互が豊かな異質なものに接触することによって、社会全体の活性化、新たなものの創造を可能にすると指摘している。

21世紀に向けての我が国の国土づくりを推進していく段階で、様々の「交流」の果たす役割は、さらに大きくなると考えられる。特に、地域主導による地域づくりには、交流の新たな促進のための交通施設の整備が重要である。我が国では、今までこれらの基盤整備に多額の投資を行ってきたが、財政事情等によりその整備は必ずしも地域の期待に届いていない面もある。とりわけ、鉄道については、国鉄の民営分割という大事業の実現に向けての取り組みの中で、その役割と意義が見失われがちになっていたのではないだろうか。

鉄道は、他の高速輸送機関と比較して、安全性が高く時間に正確な旅客輸送を可能にし、さらに大量輸送能力によって利用者の評価の高い輸送サービスを提供している。安全性、大量性に加えて、省エネルギー、省空間の面でも優れている。また、日本においては、鉄道は単なる交通手段としてではなく、明治以来、日本の近代化、文化の担い手として大きなインパクトを与え続けてきた。

国鉄がJRとして再スタートして、はや1年近くが経過した。国鉄時代の巨大で画一的運営から脱却し、地域社会のニーズに的確に対応しうる活力ある会社へ生まれ変わる懸命な努力がなされている。乗せてやる鉄道から乗りたい鉄道に生まれ変わりつつあり、駅も「駅コン」などのイベントに見られるように、その地域の玄関として見直され、地域と鉄道の一体感ができつつある。JRのこのような地域密着経営のひとつひとつが、今後、各地域において地域の情報のネットワークづくり、街づくりの中核的役割を果たしていけば、「交流」の活発化の起爆剤となるはずである。

私が昭和61年に打ち出した新幹線直行特急構想いわゆる「ミニ新幹線」が63年度から実現に向けてスタートをきることになった。これは福島・山形間に新幹線を乗り入れし、東京・山形間を乗り換え無しで直接結ぶというもので、これにより都市間の大幅な時間短縮が可能になる。

鉄道は広範に地域住民と密接な関連を持つ事業である。鉄道が地域の心を知る経営を行ない、21世紀に向けて質の高い輸送システムの実現を目指していくことが、鉄道の役割を将来にわたって機能させるためのみならず、地域の活性化のためにも極めて重要であると考えられる。

原稿受理 昭和63年2月12日